科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））公表用資料
〔平成２８年度研究進捗評価用〕

平成２５年度採択分
平成２８年３月３１日現在

わが国における都市史学の確立と展開にむけての基盤研究

Establishment and Development of Urban Historical Studies in Japan

課題番号：25220909

伊藤　毅（ITO　TAKESHI）

東京大学・大学院工学系研究科・教授

研究の概要

わが国における都市史研究の第一人者を組織し、従来個別分散的に進んでいた都市史学をひとつの堅固なプラットフォーム上に確立させ、わが国ではじめての都市史学に関する中核組織を形成する。居住の基礎学たる都市史学の拡がりを示すために広汎な研究論題を設定し、その成果を広く国内外に発信し、当該分野の飛躍的な展開を目指す。

研　究　分　野：建築学

キ　ー　ワ　ー　ド：都市史学

１．研究開始当初の背景

わが国で都市史学が学融合をともないつつ本格化したのは比較的近年のことである。人類の居住の基礎学たる都市史学を推進するための学的基盤はいまだ確立されていない。諸外国ではアーバン・ヒストリーの重要性には共通理解がすでに成立しており、学会ないし協会として堅固な組織が多様な学際的活動をともなって稼働しているのに対し、わが国の都市史学の重要性に対する認識は不十分な段階にとどまっている。

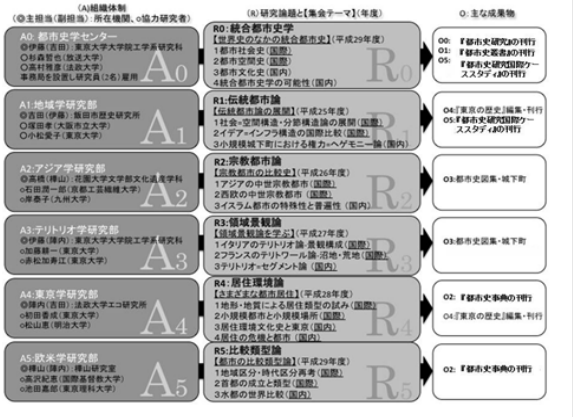
伊藤毅（建築史）と吉田伸之（日本史）は四半世紀に及ぶ研究連携の実績と、その一つの到達点としての『伝統都市１～４』（東京大学出版会、2010 年）の出版を対象として 2012 年日本建築学会賞（業績）「学融合による都市史研究プラットフォームの構築」を受賞した。この受賞理由のなかに、都市史学の今後の展開のための基盤形成について大いに期待する文言が含まれていた。各研究分担者はすでに高度な学的達成を行い、その下で有力な若手都市史研究者が分厚い裾野を形成している。いまこそ都市史学統合の好機が到来したというべきである。

２．研究の目的

1980 年代以降本格化したわが国における都市史学は、いまだ個別分散的であり一つの学問領域に統合されるには至っていない。都市史学は学的融合が不可欠な分野であり、これを実質的に担いうる研究者が限定されることがひとつの原因である。本研究はわが国における学際的都市史学の牽引者・第一人者が一堂に会し、この間蓄積してきた学的達成、人的ネットワーク、国際的連携実績を一挙に結集し、わが国における都市史学の組織基盤を確立するとともに、このプラットフォーム上で最先端の研究論題を全面展開し、成果を社会化することを目的とする。都市史学はいまや全世界が直面する都市的危機の淵源を再考する基礎的・総合的学問領域である。この基盤形成と研究展開を通して、若手研究者の育成および研究成果の国内外への発信と還元をはかる。

３．研究の方法

本研究はわが国最初の都市史学の学的基盤を確立すること（A 組織）と従来の膨大な研究蓄積の上に立った新たな都市史学を展望するための独自の研究論題群の提示（R 研究）、そしてその結果として国内外に広く発信しうる良質のアウトプット（O 成果）の３軸が相互に密接な連関をもちつつ、



実現可能なかたちで位置づける。わが国における居住の基礎学として都市史学の基盤をつくり、国内外への発信と若手研究者の育成を通して、今後の都市のあり方を現代都市の問題と対峙しつつ提示することを目指す。

４．これまでの成果

以下の組織を立ち上げ、研究部ごとに下記に示す研究論題に取り組んだ。

A 研究組織

A0 都市史研究センター＝都市史学会（東京大学内に設置、全体を統括）

A1 地域学研究部（飯田市歴史研究所内に設置、代表吉田）

A2 アジア学研究部（花園大学文化遺産学科内に設置、代表高橋）

A3 テリトリオ学研究部（東京大学内に設置、代表伊藤）

A4 東京学研究部（法政大学エコ研究所内に設置、代表陣内）/A5 欧米学研究部（樺山研究室内に設置、代表樺山）

R 研究論題

R0 統合都市史学　都市社会史／都市空間史／都市文化史

R1 伝統都市論（吉田・伊藤）社会=空間構造論／権力・ヘゲモニー論／イデア=インフラ論

R2 宗教都市論（高橋・樺山）日本宗教都市論／アジア宗教都市論／欧米イスラム宗教都市論

R3 領域景観論（伊藤・陣内）テリトリオ=セグメント論／景観構成論／沼地・荒地論

R4 居住環境論（陣内・高橋）居住類型論／環境文化論／危機都市論／小規模場所論

R5 比較類型論（樺山・陣内）地域=文化構造論／首都・世界都市論／水都・ネットワーク論

・若手研究者育成プログラムとしてオランダ・フランス・イタリア・アイルランド調査研究の実施と国際研究者交流を積極的に推進した。

0 成果として都市史研究センター＝都市史学会の学術誌として 00『都市史研究』（山川出版社）の刊行（すでに第 1 号、2 号公刊済み）と国際シンポジウムの開催とその成果刊行が過去 3 年次に実現した（2013 年 11 月日仏国際シンポジウム「空間・身分・制度」、2014 年 10 月日仏国際シンポジウム「中近世ラングドックの領域史」、2016 年 2 月「中近世ヴェネトの領域史」）。

５．今後の計画

研究論題のなかで東京研究を進めるとともに、国内外の都市史研究交流と若手を中心とした調査研究を進めつつ、以下の成果を公刊するためのまとめと準備に専念する。

01『都市史叢書』（上記 R1～R5 の成果を統合した R0 の論集、2018 年度刊行予定、A0 担当）

02『都市史事典』（上記のうち日本都市史に関するわが国初の事典編纂、2017 年度刊行予定 A0 担当）

03『東京の歴史』（全 10 巻、吉川弘文館、現在吉田・陣内を中心に 2017 年度から順次出版開始、R1・R4、A1・A4）

04『都市史図集』（科研組織の下に若手研究者を組織し、編集スタート、R1・R4・A1・A4 担当）

05『都市史研究国際ケーススタディ』（2017 年度刊行開始）

アメリカ都市史学会、イギリス都市史学会、フランス都市史学会、イタリア都市史学会、ロイヤル・アイリッシュ・アカデミー、インランド都市史学会等の国際学会との密接な連携を確立・保持する。

最終年度には過去 5 年間の研究成果を総合化し、大規模な国際研究集会を東京で実施し、成果物の出版につなげるとともに、これらの達成点を広く国内外に発信する。

６．これまでの発表論文等（受賞等も含む）

①伊藤毅編『中近世ヴェネトの領域史 Territorial History of Veneto during the Medieval and Periods』（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2016 年）

②都市史学会編『都市史研究 2』（山川出版社、2015 年）

③樺山紘一『描かれたオランダ黄金世紀』（京都大学学術出版会、2015 年）

④陣内秀信『イタリア都市の空間人類学』（弦書房、2015 年）

⑤吉田伸之『都市―江戸に生きる』（岩波書店、2015 年）

⑥高橋康夫『海の『京都』―日本琉球都市史研究』（京都大学学術出版会、2015 年）

⑦伊藤毅編『中近世フランス・ラングドックの領域史 Histoire de territoires dans le Languedoc médiéval et moderne』（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2014 年）

⑧都市史学会編『都市史研究 1』（山川出版社、2014 年）

⑨伊藤毅「近世都市の成立」『岩波講座日本歴史第 10 巻　近世 1』（岩波書店、239-276 頁、2014 年）

⑩伊藤毅編『空間・身分・制度　日仏都市史のパースペクティヴ Espaces, Statuts et Institutions:Perspectives Franco-Japonaises en Histoire Urbaine』（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、2013 年）

ホームページ等

・都市史学会ホームページ http://suth.jp

・伊藤研究室ホームページ http://itolab.org